

---

# 魔女っ子クラブ

シグレッシュ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔女っ子クラブ

### 【Nコード】

N0592G

### 【作者名】

シグレッツユ

### 【あらすじ】

元気な女子<sup>ひたは</sup>高校生二葉15歳。入学したばかりの高校で学生生活をエンジョイしようと思った部活は魔術クラブ！入部してまもなく、とある事件に巻き込まれ・・・個性ある部員たちと二葉が織り成すドタバタ活劇！

## プロローグ

1

ものすごい速さで景色が変わっていく。  
足早に歩く人々、立ち並んだ雑居ビル。  
きつちりと合わせられた腕時計は午前8時23分40秒を告げていた。

「よし！まだ間に合う！」私は独り言のように呟いて、荒い息を整えた。

自分の吐いた白い息が目の前に何度も広がる。気温は4月だということにとても低い。

私は 鈴木ハルナ 16歳。県立の共学制の高校に通い始めたばかりの1年生。

訳あってペダルを漕ぐ足に、さらに力を入れているところだ。

風を切る音がさらに大きくなり、流れる景色のスピードが上がっていく。

近くでクラクションの音、誰かに鳴らされたのではない。

私自身に鳴らされているのだ。

もうこんなところで止まってられない。車の運転手さん、お願い！止まって！

赤信号になったばかりの交差点を、タイミングが遅れて突入している。

次々にブレーキを踏む車、バイク。

一応、頭を下げて謝りつつ、大きな交差点を突破していく。

「キヤー怖い！でも、遅れるわけにはいかないの！許して！」

飲食店の集まる雑居ビルの間を抜け、大きな通りへと出る。

勢いよく曲がり角を曲がり、学校まであと500m。

あと少し。時計は8時28分20秒を過ぎていた。

よし、あと1分30秒ある！ペダルを漕ぐ足に力が入らなくなってきたが、自分を叱咤激励する。

肌寒い朝だというのに、額からは汗が滲んできていた。

最後の難関である押しボタン信号の横断歩道で、30秒ほどロスしてしまった。

あまりに車の量が多すぎて、どうしても渡れなかったのだった。

学校まであと50m！というところで、無常にもチャイムが鳴ってしまった。

まだチャイムが鳴っている間なら門を潜り抜けることができるけど、今日は間に合わない。

チャイムが鳴り終わると同時に、キツチリと閉門されてしまうのだ。

「門を閉める時間がキツチリしすぎてるのよ！」  
などと、心の中で悪態をついてしまう。

学期中に3回遅刻をすると、今時では珍しく、廊下に立たされてしまうのだ。ありえない。

バケツを持ってクラスの横に立たされるなんて・・

自分は、あと1回しか猶予がないのだ。今日遅刻すると罰が確定するのだ。

記念の写メを取られてしまう。あとで特殊効果や落書き機能を付けられて、友達の間に出回ってしまうに違いない。

高校に入って2週間、まだバラ色の学校生活に幕を閉じるには早すぎる！それだけは嫌だ！

仕方なく、非常事態の最後の手段を選択することにした。裏門の方へ回る。

裏門までの途中で、校舎の裏庭の横あたりの塀に沿って自転車を急いで停める。

その横に古ぼけたママチャリが一台。塀の横にピタリとくっつけて置いてある。

「ちよつとごめんね」そう自転車に謝ってから、その誰のものかもわからない古ぼけたママチャリの荷台に足をかけ、さらにサドルを踏み上げ、塀の上に手をかけて塀をよじ登った。

身長プラス50センチほどの塀を、苦戦しながらも何とかよじ登った。この姿は誰かに見られたくないな、と思いつつ。ヒョイと飛び降りた。

ガサガサツ！と音がする。背の低い校舎の裏庭の植木に少々ひっかかりながらも、裏庭に着地した。

あたりをキョロキョロと見渡し、さながら忍者か不審者のようにキ

ヨドリながらも周囲に人の気配が無いかどうか確かめる。  
よし、だれも居ない。

そのまま髪居れず、かばんを胸に抱え、自分の教室に向かって駆け出した。

体育館の横の路地を抜け、いつもと反対側の校舎の階段を上り2階の教室へたどり着く。

教室に入る前に、何度か深呼吸して、荒くなつた息を整え、額を流れ落ちる汗をハンカチで拭いた。

少々顔が赤く火照っているが、何事もなかったかのように自分の席に、そそくさと着席する。

8時38分。本鈴のチャイムになる2分前だった。

ホッと安堵のため息を漏らす。

間に合った・・・

その時、すぐ後ろの席から明るい元気な声で挨拶が聞こえた。

「ハルナ！おはよう！背中に葉っぱがいっぱい付いてるよ！どこから登校してきたのよ」

そう言うとプツと噴出す笑い声が変わった。

そして背中の葉っぱを取ってくれる。

あー。やっぱりバレたか。完璧だと思つたのに。

そいつは仲のよいクラスメートの神原美咲だ。

私はクルリと後ろを振り返り、お礼の言葉と共に、両手のひらを顔

の前で合わせると、お決まりのセリフを言った。

「ごめん、ありがとう！それから、たびたび申し訳ないんだけど、昨日の課題のプリント、見して！」

何気ない学校生活、にぎやかなクラス。

本鈴のチャイムのすぐあとに1時限目の古典担当の先生が入ってきた。

あだ名を「カニ」という。授業に熱が入ってくると、口元に泡を噴出しながら話すからだった。

なんとなく、顔もカニに似ている。

誰がつけたか分からないが、すっかりその呼び名で馴染んでいる。

先生本人は、そう呼ばれていることも、最前列のクラスメイトが古典の授業の時だけは、1mほど後ろに席をずらしていることも知らないだろう。

泡が飛んでくるからだ。

いつか横にしか歩けなくなるのではないか？

そうクラスではもっぱらの噂だ。

いまのところ、カニ先生は、まだ前後に歩くだけの余裕があるようだ。

本鈴が鳴るまえから、前列の子たちは、席を後ろにずらし終わっていたので、カニ先生が入ってきた時には当たり前のように席が移動し終わっていた。

委員長が気たるそうな、号令をかける。

「きり〜っ！れ〜い・・・ちやくせ〜き！」

みんなは一応、立ち上がり、そして会釈をしたりしなかったりしつつ、席に着席する。  
いつもの日常。

そう、その日の朝までは。

たしかにそうだったのだ。

なにげない日常が、このままずっと続くと思っていた。

その日の夕方に、私が・・・アレを見るまでは……………

## 赤い闇

その日の1限目の授業は古典の授業だった。

ハルナは授業後に提出しなければならなかった課題のプリントを、クラスメイトの美咲に借りて写し、なんとか事なきをえた。

しかし、カニ先生とあだ名される古典の先生の授業は、例えるなら、お経か念仏のような抑揚のない一定の話し口調で、とても眠くなるのだ。

まるで眠りの呪文をかけられたかのように、授業開始15分を過ぎるあたりからクラスの半数が眠りに落ちていく。

残りの半数も、なんとか眠りの呪文に抵抗しているものの、授業の終わりまで起きていられるのは、ほんの数名に違いない。

ハルナも例外なく、課題のプリントを写した後、猛烈な眠気に襲われて眠りの世界へ落ちてしまっていた。

眠りの世界から目覚めたのは、授業の終わりのチャイムが鳴った時だった。

短い休憩時間が終わり、2限目が始まる。次はたしか数学だった。課題は出ていない。小テストも今日は無い。

2限目の数学の授業は特に眠くなるような話し方ではないのだが・・・また授業の開始早々に眠りに落ちてしまった。

3限目、4限目も同じように眠ってしまった。

あつというまに放課後になり、帰宅する時間になった。

最近とくにこの1週間くらい、体調がどうもおかしい。

体調自体は特に悪くなく、むしろ調子が良いほうだと感じるのに、眠気が猛烈に襲ってくるようになったのだ。

入学から緊張していた生活が続いて、2週間経った今ごろになって気が緩み、ちょうど疲れが出てきたからだろうか？

それもあると思った。でもそれだけじゃない。なんかこう・・・変なのだ。

今までそんなに眠気に襲われ続けたことはない。

頭がボーっとする。

教室を見渡すと、クラスメイト達が教室からぞろぞろと出て行くところだった。

私も帰ろう。

カバンに教科書やノートを詰め込み、スクッと立ち上がった。軽いめまいがして、景色が揺れた。

「いけない、いけない。やっぱりちょっと体調がおかしい」  
寄り道せずに、早めに家に帰ろう。

教室を出て、1階の靴箱に向かう途中、美咲が声をかけてきた。

「どうしたの？顔が疲れてるよ？さては・・・恋の悩みで眠れなかったとか？」

美咲はクスクスと悪戯っぱい笑顔を浮かべている。

「違うよ！もう！そんなんじゃないってば！なんか調子が悪いのよ」  
実際、だれかに恋をしているわけでもないから、照れることもない  
のだが、なぜか顔が赤くなってしまふ。

美咲は少し心配した表情を浮かべ、今日は早く帰って寝たほうが  
いよ？と言ってきた。

うん、そうする。ありがと。

すこし笑顔を浮かべ私は、バイバイ、と軽く手を振った。

美崎は何か用があるのか、笑顔で振り返り、手を振りつつ小走りに  
走り去っていった。

早めに帰ろう、その思いとは裏腹に、家に帰りたくないと思ってし  
まう。

家族と仲が悪いというわけではないのだが、最近なぜか居心地が悪  
いのだった。

落ち着かない、と言ったほうが正しいだろうか。

学校から自転車で15分ほど走れば海へ出る。そこはハルナのお気  
に入りの場所だった。

夏でも数組の家族連れしか来ないような、小さな砂浜。毎年、海の  
家も1軒しか出ない。

今は春だから、まるでプライベートビーチのように、人気が無い。

夕方は、ジョギングをしている人や、近所の人が散歩している姿が、ちらほらと見かけられるくらいだ。

学校の裏庭に近い塀のすぐ外に停めてあった自転車に乗り、その場所へ向かった。

何か気分が落ち込んでいる時など、その場所へ来るのが定番になっていた。

天気の良い日は、夕焼けが水平線に沈んでいくのがとても綺麗に見える。

海はキラキラと夕日を映して、まるで有名な画家が描いた美しい絵画のように見えるのだった。

今日も、天気が良く、薄い雲が所々にかかっているだけの晴天だった。

砂浜に着くと、堤防沿いの小道に自転車を止め、10段ほどの堤防の階段を上り、小道から少し低い高さにある砂浜に降りた。

堤防から、波打ち際まで50mはあるだろうか。

砂浜の横幅は300mくらいで小さなほうだと思う。

ハルナは、砂浜を少し歩いたあと、波打ち際までは行かず、堤防の方へ戻って、コンクリートの階段の砂を手で払い、腰を掛けた。

そして、大きく息を吐いた。

夕日はもうじき水平線に入ろうかというところだった。

オレンジの光を映してキラキラと揺れる海をぼんやりと眺めていた。波打ち際から聞こえる波の音が心地良い。

潮の香りを含んだ風が、肩まで伸ばしてある髪をサラサラと揺らしていく。

なんか最近疲れてるのかなあ・・・  
無意識に独り言を呟いていた。

どれくらい時間が経っただろう。

夕日はほとんど水平線に隠れ、さっきまでキラキラと光っていた水面も、徐々に夕暮れの闇をまとい始めた。

夕暮れの海の美しい景色を眺めていると、少し気分がスッキリした。

よし！今日は、もう帰ろう。家に帰って晩御飯を食べ、熱いシャワーを浴びて早めに寝よう。

今日の晩御飯は何だろう？昨日はカレーだったから、今日は炒め物かな？

そんなことを考えながら、立ち上がり、紺色の制服のスカートについた砂を両手で払う。

そして何気なく、水平線の先に沈んだ夕日を見ようと視線をやった。

その先に・・・

ハルナは信じられないものを見た。いや、視界に嫌でも入った、というべきだろうか。

その姿が異様だったからだ。

辺りはすっかり夕暮れの闇に包まれ、薄暗くなりはじめていた。海の色も光を反射しなくなってきた黒く、暗くなってきた。

その視線の先に、波打ち際を歩く一人の少年と一匹の大型の犬が居た。

少年は、小学校低学年だろうか。季節感の無い半ズボンに白い無地のTシャツを着ていて、一匹の犬を散歩させていた。

リードにつながれて一緒に歩いているから、一見、ただの犬の散歩に思えたのだが・・

明らかに、不自然な感覚を覚えた。

少年はいたって普通のどこにでも居るような、普通の小学生だったが、連れていている大型の犬が、あまりにハルナが知っている犬という動物の姿と、違いすぎるのだ。

犬の背の高さは大型犬程度なのだが、首が太く少し長い。胸の形が馬のようであり、不自然に骨格がガツシリしているのだが、アバラ骨が浮きだっていてガリガリに痩せ細っていた。

特に、その毛並みの色がおかしかった。

赤いのだ。

いや、ただの赤ではない、血の色、とでもいうのか。どす黒く湿った赤。

最初は夕日の色に染まって見えたのだと思ったけれど、夕日は水平線に沈んだ後であり、それはありえない。

毛がもともと赤いのではなくて、白い毛が血と泥で染まっているよ

うに見える。

目を凝らしてみると、犬の体が自ら発光しているように見えた。

よく見ると、犬の全身は本当に血で濡れていて、腹の毛先部分から、血がポタポタと落ちてている。

ハルナは体が硬直したように立ちすくんだ。

少年に連れられて、犬が視界を横切って行きながらこちらを振り返った。

その犬の目の白目部分は、漆黒の闇のような、暗い洞窟を思わせる窪みであり、そして黒目の部分が不気味に赤く光っているのだった。

姿が異様にアンバランスだったので気がつかなかったが、犬の顔は、痩せ細った人間の老人の顔だった。

長く白い髪は、不ぞろいに抜け落ちてまばらで、顔に無造作にかかっていた。

鼻はつぶれているようで、形が歪んでおり、何かで殴られたかのよう、口と鼻から、血ともヨダレともとれぬ液体を、垂れ流していた。

口は半開きで、ちくはぐに生えた歯の隙間から、ダラリと長い舌が垂れ下がっていて、その舌の先から糸を引きながらダラダラと地面に落ちていく赤黒い粘りのある唾液は、遠く離れているハルナにも血なまぐさい匂いを運んでくるかのように思えた。

恐怖で硬直する体。

息がうまくできない。意識が薄れていく。

細い鎖で繋がれている犬の首輪の部分がグニヤリと歪んでいるように見える。猫の首輪ほどに細いのか、それとも馬の首ほどに大きな首輪なのか、実体が掴めない。

歪んで見えるのは、首輪の辺りだけではなかった。

その犬自体が、蜃気楼のように揺れているのだ。

自分の意識が朦朧としているからなのか、それとも目の錯覚なのか・

犬を連れて少年は何事もないかのように、犬のリードを片手に持ち、スタスタと視界の端へと消えていこうとしている。

過呼吸なのか、貧血なのか、キーン・・・という耳鳴りがし始めた。目の前の視界がぼやけ始める。

ヤバイ、体、お願い、動いて・・・私・・・逃げないと・・・

後ろを振り返り、海に背を向けて堤防の階段をふらつく足取りでのぼり始める。

ポケットから携帯を取り出して、リダイヤルボタンを押した。もはや、文字がかすんで見えない。誰にリダイヤルしているのだろう。それももうわからない。

堤防の上まで登ったところで、視界が真っ白になりはじめ、耳鳴りは頭いっぱいに広がり、何も聞こえなくなってきた。

最後の力を振り絞り、携帯の通話ボタンを押す。  
何度かコール音が鳴ったのだろうか。よくわからない。

「助けて・・・赤い犬に・・・殺される・・・たす・・・け・・・て  
の・・・砂・・・浜」

受話器の向こうから、留守番電話サービスの乾いた音声がかすかに聞こえてきたように思えた。

こち　　らは　　留　　守番・・・発信音の後　　に　　ご・・・用・・・件

「助け・・・て・・・赤い・・・大きな犬に・・・ころさ・・・れ・・・る・・・  
たす・・・け・・・」

プツリ・・・

通話が途切れた。

受話器を持つ腕に力が入らなくなっていた。

グラリ・・・

景色が揺れて地面が急速に目の前に迫ってきた。

何かが地面にぶつかる鈍い音、激しい振動が体に伝わった。

最後に見た景色は、赤かった。

かすれゆく意識の端で、老人の顔を持つ犬が、こちらを振り向いて不気味に笑ったかのように感じた。

ああ、きっと自分は死ぬのだ・・

こんなことならもっと好きなことをしておけばよかった。  
何気ない一日のはずだった。

なのに・・

そんな・・・・・

わたし・・

夕闇の暗いベールに包まれながら、薄れゆく意識の中で絶望を噛み締めていた。

そして、ハルナは暗い闇へと落ちていった。

暗い、暗い闇の中へ・・・・・・

## 伊月二葉（いづき ふたば）

私は伊月二葉という名前だ。

美しい草花が種から芽を出すときに、可愛くて力強い双葉を開かせるところからとって、この名前を付けたらしい。

スポーツ万能というわけでもなく、頭がとても良いとは言えない、平凡な人間の、どこにでも居るような一般人だと思う。

今朝は高校の入学式に出席してきた。

校長のスピーチを聞き、貧血で倒れる数名の学生を横目で眺めながら入学式を終え。

ちょうど今、下校しているところだ。

普通の高校に入ったつもりだったが、どうやらちょっと違ったようだった。

そう思ったのはなぜかといえば、入学式での先生方の顔ぶれが、非常に個性的ぞろい・・という事がまず一番の理由になるのではないだろうか。

そもそも、自由な校風というのがモットーなようで、先生たちにも個性豊かな人材が揃っているというのも、納得はできる。

あまり難しいことは考えず、高校生活を楽しまうと思っている。

入学を決めたきっかけは、この学校のクラブ活動の多彩さにもあった。

運動部、文化部、その他サークル活動など、多種多様な活動が活発なのだ。

自分はその中から興味のある部活に入るつもりでいる。

ただし、興味のあるものといえば、少々変わっていて、オカルトと呼ばれる分野なのだが・

書店に月刊の専門誌が発売されると、ついつい立ち読みしてしまい立ち読みしているうちに家でゆっくり読みたくなり・そして気がついたらレジに並んでしまう。

立ち読みをしてはいけないという書店もあるが、立ち読みすれば買いたくなる人も沢山居るのだし、それはそれで立派な戦略だと思ってしまう。

オカルトが好きというのは、それを信じているというワケでもなく、ただ日常から非日常へと連れ出してくれるような、そういうワクワク感というか。

つまりはちょっとした現実逃避させてくれて、日ごろのストレスを発散してくれるのが単純に嬉しいから、ということのほうが強い。

たとえば私はUFOの信者でもなく、居たら面白いな、くらいに感じて居てもいいよね、という感じだ。

高校の部活でオカルト、というと一般の人は眉根をひそめるかもしれない。

でも、個人でこっそりと楽しむだけなら、人に迷惑をかけることもないのだから、別にいいじゃない、と思う。

まあ確かに、明るい趣味じゃないとは思いますが、面白いと思う気持ち

のほうが勝っている。

そんなわけで、頭の中でいろいろと考えながら下校していると、通称、桜坂という少し緩い傾斜の長めの坂を下り終えるところで、もうすぐ街中の外れに移動しようとしている所だった。

考え事をしていたせいで、周りの景色に目がいかなかったが、綺麗に桜が咲いている。

桜坂という名前のとおり、桜並木が見事で、太い木、細い木、枝の多い木、背の高い木から低い木まで、いろんな桜がその坂道を挟んで長く続いている。

満開を通りこし、少し散り始めている。

ひとつの桜の木が落とす花びらの数は知れているが、沢山の桜が並ぶこの道は、花びらの落ちる数も自然と多くなる。

ひらひらと常に舞い落ちる花びらに目をやりながら、ああ、春だなと今更ながら実感した。

風が吹けば、桜吹雪という言葉が似合う情景で、穏やかな陽光が桜並木の影絵を作る中、見事な桃色のシャワーを大地に注いでいる。

その中を歩くのは気分が良いもので、鼻歌でも歌いたくなるのだが、それは恥ずかしいのでやめておくことにしておいた。

桜並木の横には小さな小川も流れていて、都会では珍しくコンクリートで舗装されていない自然の状態の小川だった。

ホタルの季節になれば、もしかしたらホタルなんかも飛ぶのだろうか？

地元の復興とかいう感じで、街起こしの一環として、そういう運動もしていてもおかしくない。

考えごとをしながら歩く、というと賢そうに思えるが、単なる雑念が次から次へ沸いてくるだけといえばそれまでなのだが・

そうこうしているうちに、街の外れへとやってきた。

閑静な住宅街でもなく、繁栄している街の中心地とはちがいで、チラホラと店があり、閉店して貸しテナントの看板がガラス窓に張つてある物件も結構あつて、お世辞にも賑やかとはいえない。

ここから歩いてほんの10分、15分ほどで街の中心地の繁華街に辿り着くというのに、この落差は何なのか？そう思つてしまふ。

ただ私はこういう、ちょっととした寂れた町並み、昭和の匂いのするような、どこか懐かしさを覚えるような、くたびれた感じが好きだった。

人も多すぎないし、古い商店街には美味しいパン屋さんや、パフェの美味しい古い喫茶店なんかもある。クレープが美味しいという評判の店は女子高生たちの間では人気だったりもする。

量もある、安い美味しいという学生が喜ぶ要素がたっぷり詰まった穴場的な店が多いのも魅力のひとつだった。

街の外れの小さな駅に向かうため、あと10分ほど、この寂れた町並みを歩いていくことになる。

そんな日常の風景の中に、まさかあんな異常な出来事が紛れているとは思ひもつかなかったのだが・・・

## 行方不明の学生たち

街の外れから駅へ向かう間、ふと頭をよぎったことがあった。

それは最近多発しているという、学生たちの不審な行動、いや、学生たちが不審な行動をしているというよりも、突然居なくなる事件が多発している、というべきだろうか。

家出といえばそれまでだが、警察や地元の新聞紙では誘拐事件の関連も含めて捜査をしているという。

ここ数ヶ月ですでに数名の行方不明者が出ているのだ。

帰宅する時間になっても帰ってこない、それが2日を過ぎるあたりで、不審に思った親たちは捜索願を出す。

そんな捜索願いの白黒のビラが、電信柱などに貼られていたりするようになっていた。

都会では家出など滅多に起こらないことでもなく、むしろPCサイトでは家出掲示板というものが家出した少年少女の間では流行っているほどで、一般的な現象にさえなりはじめているぐらいだ。

家出をしたものはその掲示板に、仮の住まいと食事や生活を提供してくれる里親のような人を募集する言葉を掲載する。

すると信じられないことに多数の返事の書き込みがあり、無償で世話をしてくれるよ、という親切なおじさんたちが殺到するというのだ。

ただし、やはりその見返りとして体の提供を求める者も多いらしく、事件へと発展することも珍しくもないようだ。

私はそういう家出とは無縁な、ごく普通の子供だと思うので、家出掲示板を利用したことはないのだが、もしも何かの理由で家出をすることにいったら、掲示板を見てみてもいいかな？くらいには思っていた。

親たちには信じられないことなのだろうが、このケータイやPCという電子機器があふれる情報社会の時代では、あたりまえのことでありつつある。

ケータイという小さな窓から、ものすごい量の情報が取得できる。好きな音楽、動画、そしてそれらを共有するシステムが成り立っていて、それを活用しない学生は皆無といっても過言ではない。

うまくできているもので、ゲームや着メロ、あるいはメールで使う可愛いデコメールが無料で手に入るのだが、利用を深くしようと思うと、色んな有料の会員にならないと、その先の欲しい！と思える絵文字とかコンテンツが利用できないというようになっていく。

たいてい、学生が平均しても軽く1万円ほどは消費しているのではないだろうか？

へビーユーザーともなれば、最低でも2、3万は毎月に使用する。流行の曲なんかも、ケータイやネット配信専用というものもあって、今ではCDを買いに行くことよりも主流になっているぐらいだ。

家出掲示板というのはそういう電子の森のようなジャングルの中に、ポツンと存在する、もはや普通の現象なのかもしれない。

それなのに地元の警察や親たちが顔色を変えて家出関連と思われることに、いちいち事件性を主張するのにはそれなりの訳があった。

まず、それが男女を問わず起こっていること。

そして、家出をした本人たちの、普段の素行や言動が普通で、特に家庭内不和などが関係していないことが多いこと。

つまり、親子喧嘩などのない、平和な家庭の平凡な学生が、急に姿をくまますということが、一般的な家出騒動とは全く違った特徴となっているということらしいのだ。

まあこの世の中、何があってもおかしくないといえばそれまでなのだが・

二葉が通う校区でも、2名ほどの行方不明者が出ているという。

親たちはケータイに配信される不審者情報にピリピリし、なんとか子を守るうと躍起になっている。

効果は表れているのかどうか定かではないが、ここ最近1ヶ月ほどは行方不明者が出ていないらしい。

ただし、お年寄りの行方不明などは、どこの都道府県とも同じ頻度で発生し続けているのだけでも。

そんな事を考えながら歩いていると、少し小腹が減ってきたので、寂れた商店街の、寂れた雑貨屋兼食料品店に立ち寄り、肉まんのひとつでも買って食べようか、と思い始めていた。

## 翼を持つ男

黒髪の青年が空を眺めていた。灰色のコートに身を包み、空の一点を眺めている。

星空の見えない薄暗い雲が空を覆っていた。

男は、しばらく立ちすくみ、無表情であった。

男はおもむろにボソリ・・・と呟いた。

「空へ・・・」

男の左の背中から、突然カラスのような真っ黒の翼が生えた。膝の下あたりまでそれは伸びてフワリと風を受けて揺らいだ。

数瞬のあと、男の右の背中から真っ白な翼が生えた。

対極に見える色の翼が背中から2枚伸びている、。

人通りのない街の裏通りの夕方、下校途中で肉まんを買いに行こうとしていた二葉は、偶然にもその光景を見てしまった。

何かの特撮だろうか、信じられない光景に、呆然と立ちすくむ。

思考が停止したように、まったく働かない。

男は二葉に気づいているのかどうなのか、まったくおかまいなしに空の一点を見つめたままだ。

風の揺らぎに合わせ、長く、しなやかに伸びた羽が揺れている。

黒い翼は、一見すると黒色なのだが、細かな水滴が覆っているように、光に照らされて時折、白色に輝いてみえるようだった。

もう片方の白い翼も風に揺れながら、白い輝きを乱反射しているが、それぞれの光が影を生み出すのか、時折、漆黒の翼にも見えるのだった。

二葉が呆然と立ちすくむ中、男はゆっくりと翼を広げ、数回羽ばたくと、爆風が地面を殴りつけ、土埃が舞ったかと思うと、その姿は一瞬のうちに空高くまで舞い上がって、肉眼では捕らえられないほどに小さい点となり、そして空の高みに消えた。

二葉はしばらく動けないでいたが、停止した思考回路の中で、とにかく家に帰ろう、と催眠術にかかったような足取りで、フラフラと歩き始めた。

## そして異質な者達の激闘

フラリ・・フラリ・・  
足取りがおぼつかない。

二葉は頭が混乱していた。見たことの無い、羽の生えた人間が・  
突然目の前で飛び立ち空に消えていった。

家までまだ20分ほど歩かないといけない距離だ。

すると突然、さびれた神社へと続く小道の方から、激しく言い争う  
ような、獣が吠えるような声が聞こえてきた。

野犬に人が襲われている??

無意識に二葉は走り出していた。神社の境内まで200mほどだろ  
うか。名前も知らない神社だが、子供のころに神社の裏の空き地で  
遊んだ記憶がある。

小道は草木が伸び放題で、背の高さ以上の茂みの壁に挟まれている  
ような、獣道のような道とは言えないような感じだった。

息を切らして走った。小道を抜けた、そして境内が視界に入る。し  
かし人影はない。

裏側?神社の裏側だ!子供のころに遊んだあの場所!

神社の木造の建物を越えれば裏側の空き地だ、・・・しかし・・・

二葉の足はそこで凍りついたように動かなくなった。異常な雰囲気、

物音が次第に強くなったからだだった。

二葉は神社の壁に身を潜め、忍び足で近づき、そっと裏側の空き地を覗いてみた。

そこには二人の男が向き合っていた。

野犬に襲われているのではなく、聞こえた物音は人同士が争っている物音だったのだ。

二葉はすぐに彼らが普通ではないことに気づいた。

男は2人とも若い・・・しかし異様なのだ。

片側は若い男性でありながら白髪で、魔法使いが着るような薄汚れたローブをまとっていた。

そしてもう一人のほうは、白装束で山伏が着るような服にも似た・・・いや、神官がまとうような衣といったほうが良いだろうか。街で見かけることのない服装をしていた。

そして、二人とも肩口や背中、胸から血が滲んでいる。

殺気立ち、完全に二人の世界に入っているように睨み合っている。

二葉には気づいていない。

白髪の男が何やら意味の分からない言葉を叫んだ。

右手を胸の前に突き出し、手のひらを広げた。

その右手が白く光りを放ったかに見えた。手のひらだけが発光している。

ポツ・・・音を立てたかと思うと、男の手のひらを中心に、左右に2つずつ、手のひらの形をした光の手の残像が出現した。

シンンシンと空気を巻き込むような音、見えない力の唸りが空気

を歪めているようだった。

対する神官服の男は腰に下げていた日本刀のようなものを抜刀し、縦に鋭く一閃し、何も無い空を切りつけた。

直後、光の五つの手の残像が白髪の男から放たれ、それは一本の光の帯のようになり、神官服の男に襲い掛かった。

ギギギギン・・

金属音のような激しい音がしたかと思うと神官服の男の直前で、光の帯が火花を散らして見えない何かに受け止められて閃いた。

ゴウツ・・風が唸った。

先ほど神官服の男が切りつけた中空に幾筋もの縦の亀裂が入り、光の帯を止めていた。

ギルギルギルギル！そう音がなっただと思うと激しい火花は光を炸裂させて宙に花火のように光をほとばしらせながら消滅した。

二葉は身動きできないでいた。先ほど翼の生えた人間が空に飛び立つのが幻だったのでは、と思い始めていた矢先、今度は訳の分からない激しい魔法バトルを繰り広げる男たちを目撃してしまったのだ。

2人の男は肩で息をしながら見るからに苦しそうだ。いったい何分・いや何十分・・戦っているのだろう。いったい何のために？いや、その前に彼らは一体何者なのか。

二人の男は、合図をしあったかのように、今度は接近戦を挑み始め

た。

刀を振りかざし鋭い突きの一撃を胸めがけて神官服の男は突進した。自然と気合の音が漏れる。

ローブの男は素手だ。

左手の甲で刀を払い、間合いを一瞬で詰めたかと思うと神官服の男の胸元に手刀を放った。その手は白く光っている。

ズバツ！

一撃が胸元に差し込まれ、鮮血が激しく散った……。かに見えた。しかし、相手の体を貫いたはずの手は虚しく空を切っていた。

神官服の男の体は、たちまち人型をした木の葉の集合体に変化して光る手は木の葉を貫通しただけだった。

ザワザワと木の葉が擦れあう音、そして木の葉は渦を巻き、ぱっと広がったと思ったら、黒い刃のようにローブの男めがけて殺到した。

無数の刃がローブの男を襲う。

うっ・・・と唸り、ながら両手で顔を覆いその攻撃に耐えた。しかしローブにはいくつもの切れ目が入り、至るところから血が滲んだ。致命傷にはならなかったようだが、明らかにダメージを受けていた。

しかし、ローブの男はひるまず、高らかに呪文のような言葉を短く鋭く発した。

すると、ローブの男の血しぶきが、その目の前で集合し始め、ひよる長い人、赤い影のような物体へと姿を変えた。

ローブの男がその奇怪な赤い影へ号令をかける。

赤い影は信じられない速さで数メートル先の見えない何かに向かって襲い掛かった。

ガシッ！何かをつかみ羽交い絞めにしたかと思うと、大きく裂けた口が獲物に喰らいつくようにガブリと噛み付いた。

バキバキバキ・・・と骨を砕くような鈍い音が聞こえた。

ぐうつ・・・！！呻き声と共に再び、そこに神官服の男が現れた。

その肩口に赤い影の牙が食い込んでいる。どくどくと血が流れている。

苦痛に顔を歪めながら、神官服の男は腰に下げた短剣を引き抜き、赤い影の背中に一撃を見舞った。

赤い影は断末魔の雄たけびをあげながら、姿を崩し、バシャ！と地面へ落ちた。

水溜りのような血の跡となって地面へ広がった。

二人の男は再び距離をとり、間合いを広げた。

すでに二人とも立っているのがやっとのように見えた。

ローブの男は光る手を合掌し、気合の声を上げ、何やら理解できない短い言葉を発した。

姿が揺らぐように、陽炎が立ち上り、男の全身から湯気のようなものが噴出した。

それは形を変え、一匹の黒龍となった。

神官服の男は、刀を鞘に戻すと手を素早く交差させ、複雑な印を切

った。

男の目の前に光の丸い盾が浮かびだす。その盾の周りには複数のドクロが盾の外周に沿ってグルグルと回っている。

盾の正面に、大きな口が開いた。獣の口のような、青白い複数の牙が並んでいる。

ローブの男はおもむろに右手の人差し指を突き出すと、黒龍が神官服の男へすごい勢いで飛び出した。

獣の口をした光の盾がそれを受け止める。

激しい衝撃波が生まれ、ドウツツ・という音が響く。

盾の獣の牙は、黒龍を捕らえ、激しく噛んだ。

黒龍の牙も盾を噛み砕かんと激しく応戦している。

力と力の衝突、それが生み出す衝撃波が何重にも広がり、あたりの木々をザワザワと揺らした。

突然、光がまぶしく爆発したかと思うと、光の盾と黒龍は消えていた。。

向かい合う二人は、目を開けているのも苦しいかのように、よたよたとふらついている。

神官服の男は、ガクガクと身を震わせ、ガクつと片膝を落とし動かなくなった。

ローブの男は立っては居るが、身動きひとつ出来ない。顔面は蒼白で、白髪の手よりも白く衰弱しているようにもみえる。

このままでは、ローブの男は倒れてしまふかのようにみえた。息をするのもやっただ。

ローブの男は最後の力を振り絞ったかのように両手を天へと伸ばし、手のひらを開いた。

頭上に光の渦ができたかと思うと、光のカーテンが男を包み込み・そして男は消えるように居なくなった。

片膝を突いたまま動かない男のほうに二葉が目をやると、その男の姿も、もはやそこには無かった。

地面に黒いブラックホールのような穴が開いていて、それが徐々に小さく、小さくなっていった。

そして、その暗黒の穴も、ふわりと揺らいだかと思うと完全に姿を消した。

二葉はあまりにも激しい、まるで異世界とも思える光景を目の当たりにした。

戦慄する暇もなく、ただ呆然と立ち尽くしてしまい、へなへなと腰が砕けたようにその場に座り込んでしまった。

心臓はバクバクと音を立て、耳にうるさく聞こえてくる。

その時、突然、背後から「おーい」と声を掛けられた。ギクリとしたが、振り返ることもできない。

そしてその声の主はスタスタと足音を立てて二葉に近づいてくる。

ただ、その声が妙に間が抜けていて緊張感の無い声だったので、心臓が止まるというようなことはなかった。

「おーい、君、どうしたの〜？」

声の主は二葉の目の前に回りこんで手を差し伸べてきた。起こしてくれようとしているらしい。

やっとのことで顔を上げた二葉は、その声の主が同じ学校の男子生徒だということに、着ている制服で気がついた。

くりくりとした、猫の目のようなそういう瞳の印象を受ける、黒いサラサラとした長髪の痩せた外見だった。

何よりも、その表情のなんと緊張感のないことだろうか。

いや、それが普通なのだろうか。さっきの謎の戦いを見た後なので余計にそう感じるのかもしれない。

差し出された手につかまり、やっとのことで立ち上がることができた二葉に、男は短く自己紹介を始めた。

「俺、進藤。進藤明。よろしく。はじめまして」

## 進藤明（しんとうあきら）という男

進藤明しんとうあきらと名乗った男子生徒に手を引き起こされて立ち上がったあと、二葉は何度もその謎の激闘のあった場所を振り返りながら、その場をあとにした。

まだ足に力が入らない。

目の前で起こった出来事を話そうかどうか迷ってしまふ。自分は幻覚を見たのではないか？

いきなりそういうことを話しても信じてもらえないどころか、頭がおかしいの？みたいに思われてしまっただろうと思った。

しかし、興奮が冷めやらず、少しだけ話してみることにした。

初対面で相手のことは分からないが、とにかく話さずにはいられない状態だった。

口にすることで少しは気分が落ち着くのでは？と思ったからだ。

神社から寂れた町並みの通りに戻ろうとする小道で、すぐ先を歩く進藤という男子生徒に話しかけてみた。

「なんかいま・・・なんて言ったらいいのかわからないけど、信じてもらえるかわからないけど、すごいものを見たの」

「ん？なに？」一瞬振り返ってまた歩き続ける進藤。

「あのね、なんか二人が喧嘩みたいなのをしてね、もう居なくなっただけで、魔法のバトルみたいだったの。光線とか光みたいな

のとか、龍みたいなのとか、なんか分かんないけど」

「へえ〜」何事もないかのように坂の小道を歩き続ける進藤。

やっぱり信じてもらえない・・・そう思った矢先。

「あるかもしれないよね〜。俺、魔術クラブの部長やってるし。否定とかできないな〜」

魔術クラブ？なに？マジシャン志望の集まり？

「でも、まあマジシャン希望だったんだよね、俺、最初ね。けどなんか段々と妙なメンバーが増えて、部員は10人くらい」あ、幽霊部員も入れてただけだね、と付け加えて苦笑する進藤。

二葉は何を質問したらいいか分からないまま、その男子生徒の次の言葉を待った。

「あ、俺、二年生になった。君は見かけない顔だし、新入生？」

なにか拍子抜けしてしまったが、普通の質問を受けたので、そうだよ、とだけ返しておいた。

「君ももし良かったら・・・って、なんて名前だっけ？」

「二葉。伊月二葉」

「ああ、じゃあ二葉君でいいかな？君も俺の部を見学に来てよ。わりとのんびりできる空間なんだよ」

そう笑いながら、たいした部活動してない、だらだらした部だと笑

った。

「あ・・う、うん。考えておくれ。きつと行くよ。でもまだちょっとさっきのことが頭から離れなくて・・」

「あ、そうだったね、なんかすごいを見ちゃったんだってね？幻覚かな？それとも本当にあったのかも・・」

進藤は一瞬考えるそぶりを見せたが、先を歩き続けているし顔の表情までは見えないので分からない。

神社から街へ下る小道をようやく過ぎ、街並みが目の前に広がった。たった200mほどの距離を歩くのに、とても時間がかかったような・・まだ足が震えているように思う。

街並みを見ると、見慣れた光景で、安堵感が一気に押し寄せてきて、またしゃがみこんでしまった。

進藤は少し歩いたあとで二葉を振り返り、白い歯を見せて笑った。

「さあ、駅まで送るよ」

## 部活見学

謎の激闘から家に帰り、普通に晩御飯を食べて、あまり眠れない一夜が明け、また普通の朝が始まった。結局家族には何も話せずじまいだった。

夢でも見たのだろうか？とやはり信じられない気持ちでいっぱいだった。あの二人は誰で、何の目的で戦っていたのだろうか？

一日はまた何気なく始まり、登校をして、普通の女子高生なら期待と不安に胸がいつぱいになるような、クラスメートとの初対面が、またたく間に過ぎてしまい、担任の名前も覚えてないような感じであつという間に放課後になってしまった。

若い男の担任が何か冗談を言って、クラスメートが爆笑していたのは覚えてる。

とにかく頭の中は、昨日出会った進藤という男子と、その部活を見学に行くことしかなかった。

ショックを受けたときの状態って、こういうものなのかな？

二葉は漠然と自分の痺れた思考回路のことを分析していた。

その、たしか魔女っ子クラブという、どこかコスプレのお姉さんがお酒を提供してそうな、そういう店のようなネーミングの部室は3階の端にあつたはずだ。

新校舎と旧校舎の2つがあり、その部室は旧校舎にあるらしく、4

階の新校舎から直接つながっていないので、1階まで降りて、すぐ横の旧校舎に入り、少し老朽化が進んだ階段と薄汚れた壁にちよつとした寂しい感じというか、よく頑張った建物なんだな、いっぱい思い出が詰まってるんだろ？な、と、ねぎらいの気持ちを感じながら。

3階の部室まで迷うことなく歩いていった。建物の構造は簡単で、迷うにも分岐点がなく迷えないような感じだったからだ。

部室の前に到着した二葉は、一度深呼吸をして、背筋を伸ばし、横に開けるタイプのドアを開けた。

「こんにちは！見学に来ました！」元気よく言ってみる。内心、それほど元気ではないのだが・・・

中には数人の男女が雑談しているところだったようで、ドアを開けた二葉に視線が注がれる。

二葉の視界に教室の机を4つほど合わせた机のあちこちに、見慣れたものが入ってきた。

ポテトチップス？コーラ？漫画??

何してるんだ？と自問したが、すぐに答えは分かる。単純に寛いでいるだけだ。

魔術の儀式か何かをしているのでは??と内心恐々と扉を開いたわりに・・・何気ない風景が広がっていて、力んだ自分がちよつと恥ずかしいとさえ思ってしまった。

「あ……！二葉ちゃんじゃない？私、ほら覚えてる？」  
突然、声を掛けてきた女子生徒と目があった。一瞬誰か分からなかったが、小学校のころよく遊んでいた美冬みふゆだと分かった。  
中学の頃は別の中学に進学していたので、疎遠になっていたのだが、  
・・懐かしい気持ちでいっぱいになった。

かんざきみふゆ  
神崎美冬かんざきみふゆ同い年のちょっと背の低い女の子で、綺麗というよりは可愛いという印象が残る子だった。性格は明るいし面白いのだが、ちょっと内向的なのところもあった。  
髪の色が、染めていないのに少し茶色で、二葉にはそれが少し羨ましかったことを覚えている。

今も肩のあたりまで伸ばされたストレートの髪は、昔の面影を残しており、柔らかかそうな髪質の茶色い色をしていた。

少し回想にふけたが、二葉は、うん、覚えてるよ！すごい偶然だね〜！とテンションが急に上がってきた。

美冬の方から、この部に居る経緯を簡単に教えてもらった。

美冬は、中学のときに学校を見学しに来たときに、たまたまこの魔術クラブを発見して、それも合わせて見学していたのだそうだ。  
そして入学初日、つまり昨日に正式に入学したのだそうだ。

ただし、入部したのは昨日だが、最初に見学しに来たときに出会った進藤という先輩に魔術書を渡されており、すでに少し魔術に詳しくなっているとのことだった。

進藤からすれば、それは勧誘の一環だったようだが、いきなり魔術

書を渡されて面喰らっていたら美冬を想像すると、少し笑えた。そういえば進藤はどこに行ったのだろうか？

今度は自分がその場に居合わせた美冬、他3名の男女に自己紹介をする番だった。

昨日の謎の激闘のことは省いて、進藤という人に偶然出会い、勧誘されたから来てみた、とだけ話した。

しばらく沈黙のあと、ようこそ、と照れた笑いを浮かべる者や、やったー！入部希望者だー！と喜ぶ者など、なにやら歓迎ムードになっってしまった。

いや、まだ入部するとは決まっていないのだが・・・

二葉の内心をよそに、ポテトチップスとコーラを勧めてくる部員たち。

美冬にコーラの入った紙コップを渡され、乾杯しようということになった。

そして、それぞれが紙コップを持って、ようこそ、とか歓迎するよ！とか口々に言いながら、ちいさく乾杯〜！と紙コップを合わせあった。

他の生徒は全員2年生ということで、男子が2名、女子が1名居た。男子2名はごく普通の高校生という感じで、スポーツが得意そうでもなく、本当に普通といった感じ。

女子1名は、ちょっと大人びた雰囲気を持っている子だったが、笑顔が明るくとつつきやすい印象を受けた。

順に自己紹介してきた。

「俺、徳野。徳野正春。2年生で部長の進藤とはずっと昔からの悪友」そこまで言うのと少し笑ってさらに続けた。

「趣味は格闘技・観戦のほうが多いかな。なんでこの部に居るのが分からないけど、一応部員なんだ。進藤が居るから、というのが大きな理由かな？この部での専攻は買出しと、魔力の発動に関する研究かな」

なるほど、言われてみれば背も高い。体格もちよつと良いかも知れない。でも格闘技をしているようには見えなかった。人は見かけによらないということか・・・  
ていうか、メインは買出しだろう、と二葉は密かに思った。

次の男子が自己紹介を続けた。

「僕は村田信二です」

その後は照れたように沈黙した。

え？それだけという美冬の突っ込みで、しどろもどろになりながら先を続けた。

「専攻は・・・魔方陣の作成・・・かな？」

おい、どうして、かな？・・・なんだよ、と内心突っ込みを入れたが、まあいいや、と受け流した。

そういう性格なのだろう。内向的な大人しそうな印象を受けた。

最後に女子1名の自己紹介があった。

「私は望月はるか。この部ではマネージャーみたいな感じかな？特

に何もマネジメントしてないけど、よろしくね！」と言つと、含み笑いのあと、専攻は、おまじないの言葉だと言った。みんなからは、はるかと呼び捨てにされてるから、あなたもそうして、と言つてきた。

「おまじない？」

「そう、おまじない。恋の成就だとか金運アップとか、そういう感じ。でも私は他のメンバーと違って、難しいことは分からないから、いつもここに雑談しにきてるだけって感じが強いかも」

へえ〜・・・二葉は流暢な日本語というか、スラスラとアナウンサーが話すような綺麗な日本語になぜか感心してしまった。声が綺麗なのかも？という自己紹介とは関係ない場違いな感想を持った。

そうこうしているうちに、後ろの扉がガラガラッと開き、「よお〜みんな〜」という間の抜けた声が響いた。振り返るとそこに進藤が居た。

「あれ、君はもしかして・・・えーと・・・二葉ちゃんじゃない？懐かしいね〜」

いやいや、昨日会ったばかりだろ・・・と思ったが口にしないでよかった。相変わらず間延びしている人だ。

「昨日は親切に・・・どうもありがとう・・・部活の見学に来ました・・・」

「うわ、嬉しいな〜ほんとに来てくれたんだね〜、みんなの紹介は終わったの？」

「はい、徳野さん、村田さん、はるかさん、それから美冬から紹介

がありました」

「そうなんだ、じゃあ俺も紹介しとこ。俺は部長です。神社の家に生まれてますが、マジックショーに憧れて、プロのマジシャンを目指してる2年生です」

「あ、だから昨日あの神社に？あそこが家なの？」

「いや、違うよ、俺の家は街中にあるし、あそこは俺の家の神社じゃないよ。たまたま通りかかったら、騒がしい物音がしたので行ってみただけ」

「ああ・・・そうなんだ・・・って、そうなんですか・・・」

「敬語で言い直す必要はないよ？この部は上下関係とか先輩後輩にうるさくないんだ。それに2年生のメンバーが中心で立ち上げたから、3年生は居ないし。まあ気楽にタメで話してよ」

「あ、はい・・・わかりました」

二葉はなぜか緊張してしまった。昨日会っているとはいえ、なにか謎めいた雰囲気というか、ほわんとした雰囲気というか、ちょっと変わってる人だという印象だったからだ。

目が猫の目に似ている。なにか飄々としていて掴みどころがないのも緊張の原因なのかも？

「さて、今日の部活は何にしよう。そうだ、アイスを召還しようか！徳野！コンビニからアイスを呼んできてくれ！部費はまだまだたんまりあるぞ？」とにやりと笑う進藤。

「おう、分かったぜ！俺の好みで買ってくるからな、文句言つなよ？」

そう言い残すと足早に徳野は教室から出て行った。

「私、みかんが良い〜！」去り行く徳野の背中に、はるかが叫んで

いた。

## 胎動

どろん・どろん・

鈍く心臓が脈動するような音が、不気味に壁に響いている。

暗い洞窟の中なのだろうか。

雨水がしたたり、湿気が辺りに漂っている。

湧き水の流れる音も、くぐもった音となり岩肌反射して不協和音を奏でている。

人工的に削られたような広く開いた空間に、男が一人立っていた。いくつかのランプが灯されているが、部屋は薄暗い。

闇色のローブに身をまとい、フードを深くかぶったままで、その顔の表情までは灯りに照らされていない。

ローブ越しにも、男の体系が痩せ細っており、骨ばった容姿ということが分かる。

スラリとした長身が、さらにその風貌をみすばらしいものとしていた。

その空間の中心に、柱のように天井と床をつないだ赤い物体が数本立ち並んでいた。

それは不規則に脈動し、あたかも心臓の鼓動を思わせるように蠢いている。

男はそのすぐそばで、地面から腰の高さまで盛り上がった杭のように突き出た岩の塊りに寄りかかっていた。

そこには、水晶球を半分に切ったような、半透明のレンズがあり、男はそれを無言で見つめていた。

ブツブツと何やら呪文のようにも聞こえる言葉を、その半透明のレンズに向かって投げかけているかのようだ。

男が痩せ細った右腕をレンズに伸ばし、そっと触れると、そのレンズはグニヤリと形を歪め、男が手を離すと、また半円状のレンズへと戻るのだった。

そのレンズは柔らかく、暗い岩屋の中ではまるで人の黒目のようでもあった。

ちょうどその時、柱の一つが激しく鼓動を始めた。

男は黙ってその柱を凝視する。

ビキ・・・ビキビキ・・・パチ・・・

耳に心地よくない音が辺りに、こだまする。

男は柱に近づき、柱に手を伸ばして触れた。

「おまえは・・・まだ出てきてはいけない・・・まだ・・・だ・・・時が来るまで・・・まだ待て・・・」

すると激しく脈動していた柱は、徐々に動きが遅くなり、そしてまた規則正しい鼓動のような脈動になっていった。

「それでいい・・・それで・・・お前はまだ・・・善と悪すら・・・知らない

いのだから・・・」

男は引きつったように口元を歪め、押し殺したように音を出さぬ声で笑った。

男は満足したように、きびすを返すと洞窟の空間から伸びる複数の横穴のうち、そのひとつの闇のなかへ静かに消えていった。

その同じ時刻。

赤い柱のある、その洞窟から数キロ離れた場所を走るものがいた。

月明かりが照らす静かな森の中。

道なき道を、必死に走りながら、何かから逃げようとしているかのように、何度も後ろを振り返っている。

木々の開けている場所で、月明かりが照らし、その走る物影を映し出した。

中学生くらいの少年だった。

あちらこちらが破けた学生服、手には皮の学生かばんを握りしめている。

息が苦しそうで、吐く息と吸う息が不規則になっていた。

（だれか！たすけて！）声にしたいのだが、息が続かず声に出ない。

足の裾は泥で汚れ、裂けたズボンの太ももあたりから、ぬらぬらとした血液が黒く、月明かりに照らされて鈍く光っていた。

(どうして！なんで！・・・なんで僕が！！)

何度も転びそうになりながら、雑木林のような山肌を下っていく。

額には玉のような汗が噴出しており、それが顔中を流れて目や鼻や口をびしょびしょにしていた。

それが涙なのか、鼻水なのか、よだれなのかも分からないでいた。

くぐもった唸り声のような、獣の咆哮が後方から迫ってくる。

(やばい！・・・やばい・・・！！・・・ああ！)

自分がなぜ、森のような、山のような場所を走っているのかも分からない。

「あつー！！」

声に出たと同時に、少年は足元を滑らせ、山の斜面を転がり落ちていた。

地面から突き出た細い木々、大小の石や岩、枯れた枝などが容赦なく顔や背中を叩きつける。

そして最後に垂直に崖から落下した。

数メートル先の国道へ、少年は放り出され、硬いアスファルトで激しく肩を打ち、膝をぶつけながらようやく体の回転が止まった。

その時、国道を通行するトラックが勢いよくカーブを曲がってきた。

運転手は曲がりくねった山の国道の、ちょうど真ん中で倒れている人影を見つけ、急ブレーキを踏んだ。だがしかし間に合わない。減速が追いつかないのだ！

このままでは轢いてしまう！そう思った刹那、運転手は山の斜面へ向かって本能的にハンドルを切っていた。

ガシャン・・・バリバリ・・・ギギギギギ・・・

間一髪、少年を避けて山の斜面へ激突したトラックは、30mほど先で動きを止めた。

ボンネットからは、うっすらと白い煙が噴出している。

ハンドルを切った際に方向指示器に当たったのか、左の指示器が点滅したままだ。

運転席は静まり返ったまま、中の人影が動く気配がない。

ブレーキランプがついているのだが、緩くアクセルも踏んだままなのか、後輪はまだ緩く回転したままで、ギョルギョルと音を立て、焦げ付く匂いを発生させていた。

いつのまにか降り出した雨が、山道のアスファルトを黒く濡らしていた。

冷たい月明かりのなか、妙に生ぬるい風が、オイルとタイヤの焦げた匂いを漂わせていた・・・

フクロウが寂しげに、ひとつ、ふたつと鳴いた。

静寂が辺りを包んでいる。

風がそよぐだけで、あたりには街灯もない。真っ暗な山道だ。

時だけが静かに、無情に過ぎ去っていく。

しばらくして、その事故現場を、轟音を轟かせながら数台の改造バイクが通過していった。

その中の何人かが、「おい！なんだこれ！」とか「うわ！！」とか言いながら急ブレーキをかけ、後輪がロックして波打つように蛇行し、少年を何とか避けて倒れそうになりながら止まった。

そのまま勢いを殺せず、通り過ぎてしまった仲間のバイクも数台、少し先で止まり、Uターンを始めた。

そして徐々にバイクが集結し、バイクのヘッドライトで山の斜面に突っ込んだまま動かなくなったトラックと、道の真ん中で倒れたままの少年を照らした。

ひとりが震えながら言った。

「事故かな・・・？」

しばらく経つても、車の通行は無かった。もともと交通量の少ない道なのだ。もしかすると30分経つても自分たち以外には誰も来ないかもしれない。

一刻を争う事態だった。

「おい！それより救急車だ！ケータイ使えよ！誰か！」

「駄目だ！おれ、圏外だよ！」

「私もダメだ！」

「なんだよ、こんな時に、どうすれば・・・」

言葉を失ってしまった。しかし誰かが叫んだ。

「とにかく・・・乗せて街まで降りてやろうぜ！みんな、手を貸せよ！早く！」

集まった仲間たちは、自分たちが日ごろ、家族や学校にどんな悪態をついているのかも忘れ、なんとかこの場をどうにかしなければ、という気持ちで一致していた。

「とにかくその男の子、おれの背中に背負わせろ！」

赤い髪をした青年の呼びかけに、慌てたように仲間たちが倒れたままの血まみれの少年を抱え、数人がかりでバイクに跨った青年の後部シートへ跨らせる。

少年はぐったりとしていて意識がない。しかし細く弱々しいが息があった。

「おい！もう一人後ろに乗れ！背中の子を支えてやってくれ！」

「わかった！わたしが乗る！」

背の低い小柄な女の子が少年を抱きしめるように後部座席のさらに後ろに飛び乗った。

少年の体は、ぐにやりとしていた。足や腕の骨が折れてるのかもしれない。

「おい、おまえら、トラックの方も頼む！おれは先に街まで降りるぞ！どっかの病院につれてく！」  
少年を乗せたバイクの青年が叫ぶ。

「分かった！」

口々に応じる仲間の声を背中で聞きながら、耳をつんざくような爆音で、少年を乗せたバイクは走り出していた。

## 暴走バイク

片側3車線ずつの一方通行、広く整備された国道を一台の暴走バイクが逆走していた。

車の列は、慌てて急ブレーキを踏んだり、突進してくるバイクを避けたりして、慌てふためいていた。

赤信号を空吹かしの爆音で車を止まらせ、我が物顔で通過していく。

「おらおら！ちょっと通してくれよー！！」

派手な改造バイクを運転する若者は声を限りに叫んでいた。

臉に届くか届かないくらいの、茶髪を通り越した赤い髪。

釣り目に近い鋭い目つきにシャープに整えられた眉。

ノーヘルで風になびく髪、特攻服と呼ばれる真っ黒な服。

背中には当て字で何やら読み取れないような歪んだ文字が赤い糸でみごとに刺繍されている。

暴走族だといっても、誰も違和感を抱かない外見。

しかし、その目は少し潤んでいた。

若者は思っていた。

おれが、転んで膝を擦りむいて泣いてたガキの時、おれのばあちゃんに優しく背中を抱いてくれたっけ・・・

ばあちゃん、今も元気にしてっかな？おれ・・・なんかわかんねえけど・・・親とうまく行ってなくてよ・・・

でも、なんか、わかんねえけど、道で倒れてた知らねえ中坊拾って、

なんか・・・助けてやりてえんだ・・・

ごめんな、ばあちゃん・・・元気にしてっかなあ・・・  
おれ・・・何やってんだろ・・・おれ、わけわかんねえ。不良になっ  
ちまってよぉ・・・ちくしょう！

轟音と共に車の流れを遮り、大きな交差点を無理やり右に曲がって  
いく。

サイレンの音が遠くから聞こえ出した。

騒ぎを聞きつけたパトカーが集まってきてるのだろう。

交差点を2、3過ぎた辺りで、1台のパトカーが車線に割り込んで  
きた。

「前のバイク！止まりなさい！脇に寄せなさい！！」

止まれるかよ！病院まで付き合えや！今日はお前らと遊んでる暇ね  
えんだ！

若者はアクセルをさらに吹かす。

パトカーも速度を上げ、横に並走してきた。

異変に気づく。  
ぐったりした血まみれの中学生を男女が挟んで、3人乗りで爆走し  
ている。

なにかの事件に違いない。

「今すぐ止まりなさい！！」

若者は内心つぶやいた。

お前ら、間に合わねえ！こいつ、息が止まりそうなんだ！救急車呼んでる暇なんてねえんだ！！

もう一台のパトカーが合流してきた。

サイレンがうるさく響く。

くそ、わけわかんねえ！お前ら、邪魔なんだよ！

前に回りこみ、ブレーキを踏んで行く手を遮ってくるパトカーをかわし、アクセルを緩めない。

「隼人！！危ないよ！あいつら、まだ来る！」

怪我をした少年を挟み込むように最後尾の座席にまたがる茶髪の少女が叫んだ。

「おう、抜け道に行くぜ！しっかり掴まれ！」

左に急旋回し、細道を通る。商店街の裏通りだ。

パトカーは急旋回に着いてこれず、そのまま通り過ぎてしまった。

よし、もうちょっとだ！裏道の角を曲がり、また右に・・・左に・・・あわただしく曲がっていく。

「よし！着いたぞ！」

急ブレーキをかけ、バイクを止めた。

・・・

建物の看板には「畑中歯科」とあった。

・・・

「隼人！違うよこれ！歯医者だよ！なにやってんのよ！」

「おい！ちよつとまで！なんだよ！なんなんだよ！ちきしょう！おれにも間違いはあるんだよ！！うるせえな！！」

「こんな時に間違わなくてもいいでしょ！！こいつ死んじまうよ！ヒステリーに叫ぶ少女の言葉を最後まで聞かずに、またアクセルを吹かす。」

「なんか記憶が混乱してるけどよ！次は！ぜってーいける！大きな病院だった！」

右へ左へ、また大通りへと出た。

先回りしていたパトカーが追いつき、3台に増えていた。

「うぜえ！」

そう叫ぶとバイクをさらに加速させる。

「病院まで着いたら大人しく掴まってやるよ！今度また追いかけてこして遊んでやるし！今日はそんな気分じゃねえ！」

車の流れのなかを、蛇行しながらスイスイと避けていく。

サイレンの音が遠のいていく。着いてこれないのだ。

よしー！

視界の端に、ネオンの看板で浮かぶ、病院の文字が見えた。

待ってるよ！今すぐ着く！

風を切る音だけが、爆音より耳に大きく届いてくる。

・・・

「着いた！着いたぞ！」

バイクを急停止させ、スタンドを起こす。

そのまま飛び降りるように急いでバイクから降り、少女と少年をバイクから降ろしてやる。

「両肩からかつぐぞ！救急の自動ドアはこっちだ！」

「うん！」

少年を両肩からかつぎ、自動ドアをくぐりぬけ、足早に病棟のなかに入っていく。

それを看守が大声で静止する。

「君たち！どうした！怪我人はその子だけか！」

振り返らずに、医者を呼んでくれ！と叫ぶ赤髪の若者。

「いま手配をする、その受付の前のソファで寝かせてやってくれ！」

少年をソファ―に横にさせる間、若者は目に熱いものを感じていた。無意識に伝い落ちる涙に、戸惑っていた。

外に遅れてやってきたパトカーが集結しだした。

サイレンの音が近づいたかと思うと、急にサイレンの音が止み、赤いランプの明滅する光だけが、暗い照明の1Fの広間を照らしている。

看護師が数人、慌てた様子で寝台車を運んできた。

少年をゆっくりと抱え、寝台に乗せる。

「君たちは友人かい？しばらくここで待機してて！まず、この子を処置室へ運ぶ！」

赤い髪の少年と、茶髪の少女は無言でうなずいた。

看護師たちは、フロアの廊下の角を曲がり、急いで処置室へと向かった。

直後、入り口の自動ドアが開き、早足でドカドカと警察官が5人、広間に入ってきた。

「暴走行為と逆走運転！信号無視！道路交通法違反と迷惑運転！！きさまら何を考えとるんじゃあ！！」

暴れる素振りもみせず、脇を掴まれて病院を連れ出される二人。次々に手錠をかけられていく。

警察無線で、状況を説明する警官たち。

「暴走運転の容疑者確保。身柄を署に連行する。容疑者の身元を確  
認中」

腕を掴む力が強すぎたのか、少年は身をよじって「痛えんだよ！お  
い！」

とだけ叫んだ。

背中を強くおされ、腕をねじり上げられる。

少年は苦痛に顔を歪めまいと無表情を装ってその手を力任せに振り  
ほどいた。

「抵抗してねえだろが！」

玄関を過ぎ、パトカーの前まで来たところで、全身の力が抜け、脱  
力感で力が入らず、頭が、ボーっとしてきた。

そんな働かない思考回路のなかで、少年は悪態をついた。ちきしよ  
う！おめえらぶっ殺す！

少女の体も浮くぐらいに、引きずられるように連行されている。小  
さく悲鳴をあげている様子を見て、少年は激昂した。

「ふざけんな！おめえら！女相手に！放せ！！！」

パトカーのドアが開き、頭を掴んで無理やり押し込まれる。

運転席と助手席に待機していた警察官が、バインダーの書類とボー  
ルペンを持って質問してきた。

「君たち、名前は？何をしてたんだ？」

少年は、口元がちょっと切れて血が滲んでいることに気づきながら、ため息まじりに答えた。

さっき揉み合いになってしまった時に、ひじでも当たったか・・・

「神宮寺・・・隼人・・・」

「君は？」少女のほうをペンで指差し、助手席の年配の警官が促す。

「高田さゆき・・・」

変わった名前だねえ・・・と感心したように話す。

けっ・・・それがどうしたんだよ。バカじゃねえの？

と、隼人は思った。

それから、あの中坊・・・助かったかなあ・・・

と、窓の外の幾つもの赤いサイレンの光をまぶしく思いながら。

無力感を感じながら・・・

隼人は両腕の手錠を焦点の定まらない目で眺めていた・・・

## 部活動ですから！

二葉が入学式を終え、高校生活が始まって3日が経った。

授業も中学からの延長のようで、新しい感動とかもなく、淡々と終わりのチャイムまで机に向かってている。

クラスメートの顔も、徐々に覚えてきたが、まだ仲良くなるというほどでもなく、出席番号の近い前後の生徒と少し話し出したところだ。

ここ数日は授業終了のチャイムを聞くと、そのまま部室へと向かっている。

そんなわけで、今日も部室には魔術クラブの部長の進藤を含め、6人が集まっていた。

部長でプロのマジシャン志望の進藤明、その悪友らしい格闘技愛好家の徳野正春、内気でシャイで口数の少ない村田信二、大人びた雰囲気、望月はるか、そして小学校まで一緒によく遊んでいた顔馴染みの神崎美冬。そして二葉。ほぼ毎日、同じ顔ぶれのようにだ。

部長いわく、今居るのが主要メンバーなので、ほかは殆ど顔を見せない幽霊部員とのことだった。

こうして3回部室に来てみて、ここの部活動というのも、だいたい分かってきた。

部室にメンバーが集まるまでは、先に来た部員は各々、漫画や雑誌、たまに魔術書などを広げ、寛いでいるような感じで、メンバーが集まったら、今日一日に何があったか、とか、小テストの出来具合がどうだったかなど、雑談を始め、紙コップにジュースを入れたり、

お菓子の袋を開けたりして、笑い話に花を咲かせたりしている。

つまり……

本当に雑談したりしてるだけの、部活動？と首をかしげたくなるような感じなのだ。

今日は、部長が「トランプしようぜ〜！」という一言から始まり、部員たちの「またかよ〜1回だけだぞ？」というブーイングの中、さっさとトランプを配る部長にしびしび付き合っという形で、ババ抜きが始まっていた。

二葉は部員たちでトランプをするのが初めてなので、むしろ楽しみで、部員たちのようにブーイングすることもなかった。

トランプをしながら、雑談は続く。

「そういや、うちの生徒でさ、学校にあんまり来てない奴で、暴走族っぽいことしてた……たしか神宮寺……って男子だったか。あいつ、なんか今度学校で表彰されるらしいな」と徳野が話し始めた。

「ん？なんで？」艶のあるよく通る声で、はるかが聞きなおす。その間もババ抜きが続けられている。

「なんでも、野犬かなんかに襲われて、瀕死の重傷を負ったどこかの中学生を助けたらしい」

「へえ〜。そんな子が学校に居たんだけ？2年なの？」

「ああ、そうらしい」詳しくは知らないけどな、と話しながら、徳

野は揃った2枚のカードを机にポイッと放り投げた。

「カツコイイのかなあ？」美冬も話題に参加する。その横で美冬からカードを1枚取った村田が顔を一瞬こわばらせた。たぶんジョーカーが来たのだろう。分かりやすい性格だ。

「きつと、俺よりはかつこ良くないはずだ」部長が言いながら村田からカードを一枚引く。

「部長よりカツコイイに100円」はるかが涼しげな顔で言う。

他の部員たちも、次々に賛同し、俺も100円。僕も100円と話に乗っていく。

美冬はそのやり取りがツボにハマったのか、机を叩きながら笑って苦しそうにしている。

笑い終わったあとで、私も100円・・・と賭けに乗った。

二葉を除いて全員から言われて、部長は少々落ち込んだ素振りを見せ、不平を口にしながら口を尖らせた。

二葉は隣の部長の持つ5枚くらいのカードの中から一枚抜き取った。

揃わないなく、でもジョーカー来てないし、まだ村田さんか、部長が持ってるのね。と思った。

左隣のはるかが二葉から1枚抜き取った。

部長が急に指をパチン！と鳴らした。

「げっ!!」はるかが顔を曇らせる。そしてババ来た〜!と悔しそうに嘆いた。

(えっ??なんで?)二葉は首を傾げた。さっきまで村田さん・・が持ってた・・はずのジョーカー・・。たぶん間違いないリアクションだったし。

それで、次にひいた部長がジョーカーを引いていたとしても、次にジョーカーが回ってくるのは、私の番のはず・・。でも私はジョーカーを引いてない。

二葉は部長の顔を覗き込むようにしてマジマジと見つめた。

部長は、何?と、とぼけた顔で聞き返してくる。

(もしかマジック??)

猫の目のようなコロコロとした丸い目で、とぼけ顔をする部長を見て、二葉は確信した。

マジックを間近で見ると、マジックが悪用されるのを見るのも初めてで、何と言っているか・・。

すごいと思うちょっとした感動と驚きの気持ちと、部員たちがトランプゲームを嫌がる意味が分かった気がした。

とにかく、部長が有利に決まっているようなもので・・マジシャンにとってトランプは十八番のようなもんだと、今更ながら気がついた。

「ところで、その男子な、例の表彰されるやつ、なんでも中学では

剣道の達人って有名だったらしくてな。でも高校に上がったからは、剣道も辞めちまって、バイクを乗り回して学校にも来なくなったらしいんだよな」徳野が、たぶん表彰式みたいなことにも顔は出さないだろうな、と続ける。

「もったいないね」と、はるか。

うんうん、と頷く村田。

徳野がはるかからカードを引く。

うわ！・・・と徳野が頭を抱える。どうやらジョーカーは徳野に行つたようだ。分かりやすい人たちだ。

二葉は、くくく・・・と、喉を鳴らしながら笑った。おもしろいかも。この部屋。

そのあとも、1回だけのはずのババ抜きは2回戦、3回戦を迎え、負けず嫌いらしい徳野が3連敗という不名誉な終わり方で終了してしまつた。

徳野はどうやら、本気で悔しがっているようで、口を真一文字に閉ざして顔を真っ赤にして押し黙ってしまった。

部長がそんな徳野をわざとらしく大げさに慰め、きっと明日は良い事あるよ、元気だせよ？な？と肩を叩いていた。

徳野はプイッと横を向いたまま無反応だ。

二葉は、あきらかに部長の仕業だと思いながら、ここは黙っておこうとだんまりを決めた。

だって、徳野の悔しがりかたとか、ふくれた顔が、なんか面白くて・

・それを見て笑いが止まらなくなってしまったからだだった。

外の部員たちも楽しそうに、徳野と部長のことを眺めて笑っていた。そのあと、部員たちみんなから励まされるたびに、徳野はさらに落ち込んでいたようだった。

みんな、仲が良いんだな」と二葉は思った。

それにしても、魔術の勉強とか、いつするんだろう？

そんなやり取りを、笑いながら見つめつつ、二葉が思っていた時、部長がみんなに声をかけた。

「なあ、今日はもう部活を切り上げて、ハンバーガーでも食べに行かないかい？」

一同が、そうだね、とか、いいね、とか言いながら、それに賛成した。

「私、新発売の激辛のやつ、食べてみたい！」はるかが顔を輝かせて言った。

どうやら辛いものが好きらしい。

二葉も、これといって早く家に帰らないといけない理由もないし、晩御飯も食べられるように軽く食べるだけにしとけば、まあいいか、と思い、部員たちと初めての放課後の寄り道に、少し楽しくなっていた。

冬と違い、日の長くなってきたこのごろ、外はまだまだ明るかった。時計の針は5時半を回ったところだった。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0592g/>

---

魔女っ子クラブ

2011年10月5日18時52分発行